

「国語国文学研究」第四十九号 抜刷

平成二十六年三月六日 発行

『大乘院寺社雜事記』の「生涯」に於ける
「命を失う」の意味の登場

堀
畑
正
臣

『大乘院寺社雜事記』の「生涯」に於ける 「命を失う」の意味の登場

堀 畑 正 臣

はじめに

先に、「室町中期以前の「生涯」の意味をめぐって」(『明月記研究記録と文学』13号、明月記研究会編、二〇一二年一月)「論文A」,「『看聞日記』に於ける「生涯」を含む熟語の意味―「及生涯」「懸生涯」「失生涯」「生涯谷」等の意味について―」(『国語国文学研究』第47号、熊本大学文学部国語国文学会、二〇一二年二月)「論文B」,「『看聞日記』に於ける「生涯」の意味をめぐって」(『国語語彙史の研究』三十二『国語語彙史研究会編、二〇一三年三月)「論文C」という論考を発表した。

論文Aでは、後崇光院伏見宮員成親王(1372-1456年)の日記『看聞日記』以前の古記録等に見える「生涯」やその熟語「失生涯(生涯を失う)」には、未だ「命を失う」の意味は無く、「所領を没収される、役職停止などで生活の術を失う」等の意味で使用されていることを、小学館『日本国語大辞典』(第二

版)や『角川古語大辞典』の用例を検討しながら論証した。

論文Bでは、続群書類従完成会本『看聞御記』で拾い得た『看聞日記』の用例の中、「生涯」を含む熟語(「及生涯」「懸生涯」「失生涯」「生涯谷」等)の意味を検討し、『看聞日記』では、未だ「命を失う」の意味は無く、「所領を没収される、役職停止などで生活の術を失う」等の意味で使用されていること、派生的意味として「窮地に陥る」の意味があることを述べた。論文Cでは、『看聞日記』に見える「生涯」の単独例を構文的な展開と意味の展開を考察し、「所領を没収される、役職停止などで生活の術を失う」等と「窮地に陥る」の意味があり、未だ「生涯」に「命を失う」の意味は見えないことを論じた。

「生涯」の語は、室町後半になると「命を失う」の意味が生じる。しかし、いつ「生涯」に「命を失う」の意味が現れるのかは不明である。今回、『看聞日記』後の古記録『大乘院寺社雜事記』を調査し、「生涯」とそれを含む熟語の用例一三七例

を得た。本稿では、『大乘院寺社雑事記』の「生涯」の例に於いて「命を失う」の意味がいつ現れるのか、年代順に用例をあげ検討を行うものである。

一 調査資料と「生涯」四四例

『大乘院寺社雑事記』^②の記主は、大乘院門跡尋尊（永享二年（一四三〇）～一五〇八）で、父は一代の碩学、関白一条兼良である。八歳の時、経覚の後を襲い興福寺の子院大乘院門跡に第二十七代新門主として入院した。『大乘院寺社雑事記』の記録期間は宝徳二年（一四五〇）～一五〇八）である。『寺社雑事記』の他、別記を含め約百九十冊ある。その全てが自筆原本で、原本は内閣文庫にある。

今回、調査では国立歴史民俗博物館の『大乘院寺社雑事記』DBの検索で得た一三二件の「生涯」のデータを「増補 続史料大成（普及版）大乘院寺社雑事記」（全十二巻）で調査し、一三七例を得た。その後、東京大学史料編纂所の写真帳で用例の確認を行った。今回、紙数の都合で用例は年代順に四四例（長祿二年（一二四八）～文明八年（一二七六））をあげる。

二 『大乘院寺社雑事記』の（一二四八～一二四九）に於ける「生涯」の検討

『大乘院寺社雑事記』に初めて「生涯」の例が見えるのは、長祿二年（一二四八）の例である。まずは一二四八～一二四九年の例から見ていく。（用例の漢字字体はJISの第3水準までは旧字体を採り、それにはないものは新字体とした。解説は新字体を用いた。小書きの片仮名は漢字と同じ大きさにした。）

1 一同庄之内新郷之武澤名并新庄田成畠銭事、以京都御判被安堵之由被申歟、河口庄事、自大乗院本願法印、當門跡致知行事及數代、仍代々綸旨・長者宣・御教書等在之、一円門跡可知行旨也、仍云給主云郷々名々、及百口供僧以下、皆以爲門跡自專、于今無相違条明鏡也、限此一名爲公方可有御計事、子細何事哉、尤以可歎申入事也、且爲門跡生涯不過之者哉、定而依被構申御判等被成者歟、是又不可申承引事也、（長祿二年（一二四八）十月十七日、一卷493頁下4行）

河口庄の新郷の武沢名は、もともと大乘院の知行であったが、近年所有が不明確になり、公方を通して計りごとが成されるようになった。当該箇所は例5を参考にして「生涯不（可）過之者哉」と「可」を補い「門跡の生涯をなし之を過まつべからざる者かな」と読んで、「門跡の生涯（莊園一名の没収）をなし誤ってはならない」の意と捉えた。とすれば「生涯」は「莊園

一名の没収（門跡の損失）」で損害を被ることである。

2 一慶英（香齋房）

來、内々人ノ申候者、御房中以下自他門衆内々令會合候て、以連署等御身上事ヲ京都へ歎申入候ハん之由、及其沙汰云々、別心ノ衆共致沙汰事也云々、良家ニハ、松林院・修南院・佛地院・東院相加云々、可得御意云々、仍此子細内々豐田方ニ仰遣了、爲談合來一日可參落旨仰付了、予身上事更以可歎申入京都子細、不覺悟者也、於住侶・門徒者、諸供闕分出來時、方々ヨリ所望、ソキニハ一人ニ被仰付之之時、自余ノ仁鉢ハ皆以無所存者歟、是無力次第也、於松林院者、今度武澤名以下并無沙汰分事、依催促所存ヲ申歟、於修南院者寺務ノ事也、予初任事不所存歟、於東院者今度探題事云々、何モ彼仁所存不道無極者也、此上ニ可生涯事無力次第也、

（長祿二年（1458）十月二十七日、一卷505頁下2行）

御房中以下、他門衆より内々会合して、連署等を以て（尋尊の）御身上の事を京都へ歎き申し入れることが、沙汰に及んだという。良家では、松林院・修南院・仏地院・東院が加わり御意を得た。自分の身上の事を更に以て歎き申し、京都に入る子細は覚悟しなかった。住侶・門徒は諸供闕分出來の時の対応への不満がその理由。松林院は武沢名の件。修南院は寺務の事。東院は今度の探題の事という。彼の仁は不道無極者である。当該箇所は「此の上に生涯すべきことは力無き次第である」とあ

る。尋尊は皆から京都へ訴えられ、興福寺別当を追われようとする状況であった。彼は翌年長祿三年に興福寺別当を辞している。この「生涯」は「地位喪失・役職停止」の意である。

3、以覺朝安位寺殿ニ此子細内々申入了、其趣ハ、寺門ノ面々住侶以下事、此口遊事以外次第也、子細何事候哉、不可然旨被懸御生涯被仰者可畏入者也、さ様二候者可畏入候、一向以御意可被其沙汰之由申入了、

（長祿二年（1458）十月二十七日、一卷505頁下6行）

用例2に続く箇所ので、同一の一つ書きの中の項目で行替えがしてある箇所である。前の門跡の安位寺殿（経覚）に子細を内々申し入れた。寺門の面々住侶以下事、この口遊の事は以外の次第である。「（経覚様から）然るべからざる旨を御生涯に懸けられ、仰せらるれば畏まり入るものなり」として経覚に働きかけを要請したものである。この「生涯」は「地位喪失や役職停止（退任）を覚悟して」の意か。

4、今度井山寺御壺錢、當年分百五拾貫文執進上申候、御公事落居事、來年二月中爲兩人一途可申定候、万一背上意子細候者、兩人懸生涯可致奉公候、當以不可有如在緩怠之儀候之由、可然様可預御披露候、恐々謹言、

十二月十八日

古市
春藤丸判
頼田
英判

尊藤殿

(長祿二年 (1458) 十二月十八日、二卷21頁上17行)
万一、上意に背く子細があれば、「兩人生涯に懸けて奉公致すべく候」とあり、ここは「地位や財産を失う覚悟で」の意。

5 一當社毎日不退神供事、於去年中者爲社家令申之間、一円爲學侶入立之、去々年依炎旱神供料所皆以無足故云々、去年又令炎旱之間、當年中神供事、爲社家申之、社家書狀等爲寺務取次、學侶二披露之、去年十二月末事也、然而學侶評定二ハ、此神供事爲社家嚴重ノ以料所令沙汰事也、一年・二年之炎旱ハ無力其職ノ不運也、居職上者可立沙汰条不能左右處、去年中事學侶不取入訖、請取上ハ無力、於當年者學侶中不可存知之由一決了、但正月朔日ヨリ七日マテハ、爲唐院令下行之、自今日學侶不可存知云々、若此上二兩卷符等及闕如者無力、就諸職テ可改永之由神水評定一決者也、爲社家生涯不可過之歟、(後略)

(長祿三年 (1459) 正月八日、二卷51頁上14行)
当年中の神供事を社家をして之を申した。社家の書狀等を寺務をして取り次ぎ、学侶に披露した。去年十二月末の事である。ところが学侶の評定には、此の神供の事は社家をして嚴重の料所を以て沙汰する事と決めたという。当該箇所は「社家の生涯をなし之を過まつべからざる歟」と読み、「社家の損失(正当な要求である神供分を納めてもらえないこと)」で財産没収の

派生的な意味と捉えた。

6 一去年大會研學堅者清憲得業他界、世間事云々、去年堅義時木短尺十枚之内、一枚短尺箱二取落之、珍事不吉旨及沙汰之處、如案及生涯了、并複請事向後不可沙汰事歟、

(長祿三年 (1459) 正月十六日、二卷65頁下10行)
去年堅義時に木短尺十枚之内、一枚の短尺を箱に取り落した。珍事なので不吉の旨、沙汰に及んだ處、案のごとく「生涯に及びらんぬ」とある。「及生涯」は、本来は地位や役職を失い、財産を没収されることをいうが、ここは文脈上「滅亡(命を失う)」という意味にまで派生している。

7 一御今參局所行、今度御産不平安、剩若君則早世事、彼局調伏故トテ去十三日被召取之、十四日隱岐國ニ配流、或辛崎ニシツメラル之由風聞云々、當室町殿ヲ守立申ハ此局ナリ、於女中テ權門不過之尤歟、今度事不知實否、一向被失生涯事、御沙汰次第指過歟、但御大方殿申御沙汰故云々、此間不和故也、彼局跡大館二給之、依一家也云々、

(長祿三年 (1459) 正月十六日、二卷66頁上10行)
御今參局が調伏したとのことで若宮が早世した。事の実否はよく分からないが、十三日に召し取られ、十四日に隱岐國に配流、或いは辛崎にしばらく留められるという噂である。「一向に生涯を失なわる事、御沙汰の次第指し過ぎ(やり過ぎ)歟」とあ

る。「失生涯」は「地位や財産を失う」の意であるが、「しづめられる」から、文脈上「命を失う」の意が出てくる。

8 一於一乗院御房中并良家衆評定在之、於御房中者巨細ヲ不存知上者、沙汰次第不及了簡、但重而門主ノ及御生涯者御房中不可有緩怠之由、連署ニテ各退出了、良家衆評定之趣未聞者也、(後略)

(長禄三年 (1459) 四月廿八日、二卷143頁下4行)
一乗院御房中ならびに良家衆評定があつた。御房中においては巨細を存知せざる上は、沙汰の次第了簡に及ぶべからず。但し、重ねて「門主の御生涯に及ぶ」は、御房中緩怠有るべからざるの由、連署して各々退出したということである。前日廿七日の条に「然而一乗院御房中成集會、以廻文御房人相催サル、由風聞」とあり、不満が続出して相当もめていたようである。ここの「生涯」は門主の交代(罷免)を含んでいたとすれば、「地位剥奪(追放・罷免)」に及ぶという意であらう。

9 一自豊田・古市方以使者昨日越智方エ成下様申遣間、越智返事ニハ、兩門御事候ハ、一乗院殿ニ可參条勿論候、但今度事豊田・古市懸生涯沙汰事候間、ソマツノ儀不可有候、如何様可申合云々、越智申狀尤也、

(長禄三年 (1459) 四月廿九日、二卷144頁上1行)
例8の次の日のことである。越智方へ申し遣わしたところ、

一乗院と大乘院の間に事が起こった場合、越智は大乘院でなく、一乗院に味方するのは勿論であるという。但し今度の事は大乘院側の豊田や古市が「生涯に懸けて」沙汰の事を行うので粗末の儀はないだろうと申狀に書いてきた。ここの「懸生涯」は「失敗すれば地位や所領・財産を失う覚悟で」の意味である。

10 一越州事自袖留木方注進之、去十三日合戦二堀江石見方打負了、重而爲上意能登・越中勢共被立之、屋形生涯珍事也云々、(長禄三年 (1459) 五月廿一日、二卷154頁下16行)
屋形は斯波義敏、彼はこの時の戦に負けて周防の大内教弘のもとに落ちのびたと『福井県史』〈通史編2中世〉第三章³にある。故に「没落(他地域へ逃げる)」の意味である。

ここまで『大乘院寺社雜事記』一四五八〜五九九年の「生涯」十例を検討してきた。もう一度示すと表一のようになる。

表一

番号	年代	語句	「生涯」の意味
1	1588	門跡(の)生涯	莊園一名の没収(門跡の損失)
2	1588	(尋尊が)可生涯事	地位喪失・役職停止
3	1588	(経覚が)被懸御生涯	地位喪失や役職停止を覚悟して
4	1588	兩人(が)懸生涯	地位や財産を失う覚悟で

番号	年代	語句	「生涯」の意味
5	1559	杜家（の）生涯	杜家の損失
6	1566	清憲得業（が） ゝ及生涯	滅亡（命を失う）
7	1566	御今参局（を） ゝ被失生涯	地位や財産を失う、又は命を失う
8	1569	門主ノ及生涯	地位剥奪（追放・罷免）
9	1569	豊田・古市（が） 懸生涯	地位や所領・財産を失う覚悟で
10	1569	屋形（の）生涯	没落（他地域へ逃げる）

「及生涯」で見ると、例6の「清憲得業（が）ゝ及生涯」は、文脈から「命を失う」の意味に読み取れるのに対して、例8の「門主ノ及生涯」は「地位剥奪（追放・罷免）」の意味である。また、例7の「御今参局（を）ゝ被失生涯」も「地位や財産を失う」のほか「命を失う」の意味が文脈から読み取れる。1、10の用例からこの時期の「生涯」は「地位喪失・役職停止」から「罷免」や「追放」へ、また「財産や所領の喪失」から「財産の損失」、「没落（逃げる）」へ、そして「命を失う」の意まで、意味の拡張が成されつつあったと見るべきであろう。

「命を失う」ということは地位や役職は当然失う。財産は子孫に伝わることもあるが、この頃の財産の多くは所領に依っていたので、役職との関係が強い。例6の「清憲得業」の場合、「大曾研學暨者清憲得業他界、世間事」という点（「世間」

は「聖人ではない凡夫のこと」の意味もある）に注目すると、身分が低く所領や財産を持たない個人の場合、「及生涯」は「命を失う」の意味にまで行き着きやすいということであろう。例7の場合も所領や財産を余り持たない個人であり、他の例は門跡、門主、杜家、屋形など勢力や財力の大きい人の場合は、勢力や財力が凋落することをいい、「命を失う」というところまでは行かなかったということであろう。

しかし、文脈上からとはいえ、「命を失う」の意味が例6や7の長祿三年（1560）に窺えるのは事実である。一四五八〜五九年頃の「生涯」は「地位や役職の喪失」、「所領・財産の喪失」、「没落・罷免・追放」、「命を失う」の意味まで含んで使用されていたと見るべきであろう。文脈や主語によって意味が多岐にわたっていたと考える。これがその後、徐々に収束していく。その様子を次の年代に見てみよう。

三 『大乗院寺社雑事記』の（一四六〇〜一四七六）に於ける「生涯」の検討

次に『大乗院寺社雑事記』の一四六〇〜七六年までの用例三十四例を検討する。説明は簡略化できる所は簡略化する。

11 今度符坂油取事、相乱以外事也、如此之間、向後事可爲如何哉之間、爲座衆生涯者也、然而自成身院申入趣ハ、於盜

賣油者可取之、自然召上油有之者、以札可召寄候、無其儀者可押取之由、可有座衆等御下知之由申入之間、門跡力者并名主定使・成身院使兩三人ヲ以符坂衆ニ仰觸了、(後略)
(長祿四年(1460) 閏九月十五日、二卷342頁上2行)
「座衆生涯を為すものなり」とあり、相乱を起こした符坂衆の「地位(売買の權利)を剥奪する」の意。

12 一深川・豊田兩人召具小倉參仕了、去年緩怠条々平ニ可蒙御免之旨、小倉捧咄文、深川・豊田又請乞申入子細在之、小太郎男重而任雅意子細在之者、生涯ヲサセテ可進之由、嚴蜜ニ申入了、此上者閣千万所存者也、小倉又參坊人之由申入之、仍各對面了、

(寛正二年(1461) 三月廿日、二卷449頁下11行)
「生涯ヲサセテ進らすべき由」とあり、「地位を剥奪して罷免する」の意と取る。

13 一昨夕平郡之切答父子及生涯云々、何事哉、

(寛正二年(1461) 五月十八日、二卷486頁下15行)
「平群の切答父子生涯に及ぶ」とあるが、「地位剥奪・追放」か「命を失う」か未詳。

14 一武衛御免云々、伊勢守申沙汰也、甲斐・朝倉之可成生涯云々、誠以天下可爲珍事歟、

(寛正四年(1463) 十一月十九日、三卷367頁下2行)
「甲斐・朝倉の生涯を成すべき」とあり、「地位剥奪(罷免)」、「没落」、更には「滅亡」まで意味するかは未詳。

15 一去廿三日曉、大學寺^⑤房官長田、率五六十人勢打入大學寺門跡之間、門主被意得生涯被落處、召取引入私宅云々、不得其意、希代事也云々、

(寛正六年(1465) 三月廿七日、三卷479頁上11行)
「門主意を得られ、生涯し、落ちるる處、召し取り私宅に引き入るる」とあり、「地位や財産を放棄する、没落」の意か。

16 一昨日八時分井山禪徒集會砌喧嘩、指違了、禪徒兩人死去、然之間中尾大坊ニ會合之學衆等悦之音聲、禪徒令腹立、則大坊ニ押寄、但指堅之間、學衆帳本坊妙觀院ニ押寄、學衆四人・下部二人打止之、坊舍破却之、坊主此間筒井ニ召置之、留守也、筒井披官云々、次護摩新大門坊破却、次如光院破却、次湯屋前坊破却、坊主打死了、^⑥次角坊破却、坊主則打死了、當年預云々、仍相殘學衆等悉以逐電了、自然坊舍無殊儀云々、於妙觀院禪徒兩人被打了、生涯^⑦合十二人云々、以外次第、可歎々々、

(寛正六年(1465) 四月十日、三卷483頁上11行)
「生涯の衆、合せて十二人」とある。「命を失う」の意。

17 一木津材木座^与筒井披官人材木賣京上檜皮事相論、木津座ハ一乘院寄人云々、筒井披官椿井之材木屋ヨリ京上之檜皮、自一乘院座押取了、其故ハ京上以下振賣材木座ハ、一乘院座沙汰也、於材木屋賣之事者、奈良商人計也、爲材木屋振賣事ハ一向無其例事也、仍押留之云々、此等之子細条々以舊記自一乘院被仰筒井之處、不承引、剩稱失面目、申付衆中爲衆議一乘院二問答申、奉行袖留木可罪科云々、先以押置檜皮事、衆中二可被預下之由申入之間、無力被許可云々、然而木津座衆又自一乘院御下知不承引、雖及生涯不可出旨申切了、此上者門跡儀不及了簡敷、今日筒井上洛致計略云々、筒井沙汰次第不可然事也云々、

(寛正六年 (1465) 六月十六日、三卷498頁上16行)
「生涯に及ぶと雖も出すべからざる旨申し切り了んぬ」とあり、
「地位の剥奪（罷免）に及ぶ」（といえども）の意である。

18 一京都之儀山名方勢并朝倉披官勢等、所々土倉・酒屋以下方々令乱入、運取雜物剩放火、希代至極沙汰也、殊更伊勢守披官町人一向及生涯云々、併於于今者失公方御面目者也、可歎々々、(文正元年 (1460) 九月九日、四卷98頁上14行)
「伊勢守の披官町人を一向生涯に及ぶ」とある。「家の破壊や資産を奪う」（殺害も含むか）の意。十日の条に「伊勢守・藥西堂披官人在々所々、自山名方・朝倉方破却放火、其外馬借乱入狼藉無是非次第、洛中人民可及餓死云々」とある。

19 一西院庄職人檢斷事、一乘院^与伊勢守及相論、成大訴之處、
20 自伊勢守方相語筒井而、申破寺門大訴之間、一向一乘院被失面目了、道理眼前故歟、被任神慮之處、今度伊勢守身上言語導斷次第、可及生涯計也、筒井進退又非一途、併蒙一乘院家御罰了、以一旦知音忘代々由之条、誠以希代事也、殊更此事無正躰者、可成不知行地条不能左右、旁以可思案事也、筒井沙汰次第不覺旨多分令申、先年當門跡^与一乘院、寺務事二自他所存ヲ申事在之キ、自他門相分及生涯計儀出來、然而小泉今力并伯父新成一乘院御方了、筒井之闕所押領故歟云々、以一旦之儀背代々主君命了、不經幾^兩□□兩人共以失生涯了、併當門跡罰也云々、(後略)

(文正元年 (1460) 九月晦日、四卷103頁上6、11、14行)
例19は、「一乘院と伊勢守が相論に及び、大訴を成したが、伊勢守の方より筒井に語いて、寺門の大訴を申し破つたので、たいそう一乘院が面目を失われた。道理は明らかだったからか、神慮に任せられた處、今度、伊勢守の身上は言語道斷の次第で、生涯に及ぶべきばかりである。筒井の進退もまた一途に非ずで、全てこれは、一乘院家の御罰を蒙つたものである」という内容である。よって「生涯」の意味は「地位や所領・財産を失う」状況になる意である。例20、21は「先年、當門跡と一乘院、寺務の事に自他の所存を申す事があった。自他門、相分け、(20)生涯に及ぶばかりの儀が出来た。ところが、小泉今力と伯父の新が一乘院の御方を成した。筒井の闕所を押領する故歟とい

うことであつた。一旦の儀を以て代々の主君の命に背いた。幾ばくも経ず兩人共、以て(21)生涯を失つた。すべてこれは当門跡の爵である」とあるから、例20も21も「地位や所領・財産を失う」の意である。なお、文正元七月廿八日の条に「先年小泉今力丸并新致寺務相論事、不忠子細在之き、所存外也、背信義間不經幾程兩人共自滅了」(四卷88頁上13～15行)とある。

「生涯」は「自滅」と同意義であらう。

22 一就衛門佐出頭事、大和・河内兩國物念、無是非次第也、於當國衛門佐引汲之輩者、越智彈正忠家榮之一門、吐田・曾我高田・小泉延定房・高山・万歳・岡等也、此等子細一々以細川右京大夫伺上意之間、近日可被立御勢云々、可出陣大名畠山・京極・山名伊與以下被仰付輩、大名・近習濟々、於預職者可蒙仰旨、右京大夫申入云々、仍畠山可出陣之旨必定之由、光宣法印申下之由風聞、爲事實者當國引汲衆可爲生涯者也、(後略)

(文正元年(1466)十月五日、四卷107頁上9行)

「大和・河内の両国が物念しい状況で、当国に於いて衛門佐(畠山義就)に加勢する輩は、越智彈正忠家榮の一門、吐田・曾我高田・小泉延定房・高山・万歳・岡等である。これに對して討伐の軍が派遣されるということで、畠山(政弘≡政長)が出陣するのは必定であるという風聞である。事実であれば、当国に引汲する衆は生涯を為すべきものである。」という内容であ

る。「生涯」の意味は「地位や所領・財産を失う」(「没落」)の意味で、場合によっては「滅亡(命を失う)」もあつた。

23 一去廿三日夜打上澤被打畢、兄空一房男之沙汰也、彼空一房ハ室生寺之法海上人弟子、灌頂マテ致其沙汰了、澤家相亂事出來、然之間世ニ落了、法海上人生涯モ此由來也云々、

(文正元年(1466)十一月二五日、四卷115頁上6行)

『經覺私要鈔』④に「一自室生寺有狀、去九日爲澤方沙汰、前在家大畧焼拂後令亂入寺、資財・雜具・三衣一鉢・紙衣等至マテ悉取之、爲衆僧不便、爲身生涯也、仍隱居大野寺之由法海上人申賜了、言語道斷次第也、爲天下可謂表事、空一房引級之故也」とある。例23は「地位や所領・財産を失う」の意である。

24 一昨日京都合戰云々、十七日畠山政弘屋形自放火、率人勢上御靈二陣取之、公方ニ義就・山名入道宗全・一色等間籠故也、京極入道等今出川邊ニ罷上陣取、政弘爲合力也、細川勝元一黨悉以爲政弘合力相集云々、然而公方事外御迷惑、可及御生涯之間、山名・細川兩人兩方合力事可止旨、平二被仰請云々、依其義就令腹立、罷立御前押寄御靈之陣、昨日自早旦至夕方一日合戰、兩畠山之儀勝負可有一途者也、(後略)

(文正二年(1467)正月十九日、四卷144頁上14行)

『ウキイベディアフリー百科事典』⑤の「応仁の乱」の説明に依れば、「二月十八日、(畠山)政長は無防備であつた自邸に火

を放つと兵を率いて上御靈神社（京都市上京区）に陣を敷いた。一方義就は後土御門天皇や後花園上皇、伏見宮貞常親王を一つ車に御乗せして室町亭に避難させた。足利義政は畠山の私闘への関わりを禁じるが、宗全や斯波義廉、山名政豊（宗全の孫）、朝倉孝景らは義就に加勢した。一方勝元は義政の命令に従って援軍を出さなかった。このため勝元は「弓矢の道」に背いたと激しい非難を受けた」とある。ここの「及御生涯」は「地位や所領・財産を失う」（没落）、又は「滅亡」の意か。

25 一昨日成身院披官人濟々於嵯峨法輪橋被打了、小者松石丸同生涯了、福住手負了、自畠山右衛門佐方沙汰也、打手甲斐

庄云々、成身院迷惑旨申下云々、誠以察遣了、

（應仁元年（1467）三月十五日、四卷159頁上11行）
「命を失う」の意。

26 （前略）今度御幡事日野内府申留之、仍自細川近日内府亭可焼拂云々、内府亭堀被堀之、家門へも夫錢進之、大門・小門前二被成大堀畢、万一火事出来有之者、不可有御出之通之間、可及御生涯云々、珍事此事也、家門大門・小門御前も日々夜々合戦場也、（後略）

（應仁元年（1467）五月二日、四卷195頁下1行）
「万一火事が出来したら、御出の道がないので、可及御生涯云々」とあるので、ここの「生涯」は「命を失う」の意である。

27 （中略）只今直二被仰出候兩座間事、於于今者一向可被失御面目之上、寺門國中沙汰御生涯不可過之、仍可然様被申合尾崎、一烈儀無相違様可被入魂之由所也、恐々謹言、

十二月三日 孝承

執行御房

（應仁二年（1468）十二月三日、四卷266頁下1行）
ここは意味が通じにくい内容であるが、「寺門國中沙汰御生涯不可過」とあるので、「寺門・國中の沙汰の権限を失う」と読み取れば「生涯」は「（沙汰の）権限を失う」の意か。但しなお、再考すべきである。

28 一多武峯今日大焼亡、一昨日南院一□□□□□没落、平等院以下衆蜂起、南院衆ヲ追懸□□□□□及生涯歟、昨日平等院以下衆又没落、自焼、今日□□□南院衆歸山、在々所々焼拂了、天魔所行、一山滅亡希代珍事、□藤家尚々不吉事也、（後略）

（應仁三年（1469）二月二十八日、十二卷（補遺）166頁下11行）
「平等院以下の衆が蜂起して、南院衆を追懸けて、及生涯歟」とあり、「昨日平等院以下の衆又没落、自焼」とあり、「今日南院衆が帰山した」とある。ここの「生涯」の意味は「地位や所領・財産を失わせる」ことで、「追い払う」の意味であろう。一旦追い払ったのが、また帰ってきたというのであろう。

29 今度番条^与寺門間事、色々及其沙汰、所詮号□□方テ寺門ヲ引破可失筒井之由支度共□□仍爲筒井一向成生涯之間、今日筒井以下□□院會合可有連署歟云々、

(應仁三年(1469)三月五日、十二卷(補遺) 168頁下18行)
『気分はコクジン別館』(Gooブログ)^⑥の「番条氏」によれば、番条氏は応仁文明の乱の頃まで越智党に属し筒井氏と争っていたという。ここはその頃のことか。「筒井をして番条の生涯を成す」で「番条の」地位や所領・財産を失うようにする。若しくは「滅亡」させるの意も含むか。

30 一新御所^{大納言殿}、去月十六日兵庫ニテ御生涯^七之由風聞、無心元者也、尚々可付才學、一兩日中關所ニ神人可下向云々、仍書狀遣之了、

(文明元年(1469)十一月二日、四卷338頁上7行)
『公卿補任』^⑦によると、権大納言の一条政房の項に「十月十七日有事薨於攝州福原」とある。ここの「御生涯」は「命を失う」の意味である。

31 自福原新次郎入道參申、去月十七日御生涯^八之様子細相語之、其時御歌持來了、

(文明元年(1469)十一月十八日、四卷343頁下6行)
「命を失う」の意味。

32 一光宣法印於円明院今日^{辰刻}、入滅、八十歳、年久シク奉公分也、不便々々、仍筒井并明舜法師方ニ、爲訪遣清賢法橋了、今日則於般若寺荼毗了、(中略)、今度一天大乱ハ一向此仁計略旨云々、其外就軍方種々惡行、他國・自國無其隱之間一期候畢、定可爲如清盛公之由、兼日各相存之處、思外時宜中々無是非次第也、但此仁ハ神事・法會并寺社事、懸生涯致計略了、且又大正直之者也、仍諸事叶神慮之間、三宝御引導不能左右可喜々々、不便々々、

(文明元年(1469)十一月二十日、四卷344頁上6行)
「失敗すれば地位や所領・財産を失う覚悟で」の意。

33 一大轉經院兒^{平靜息}、坊主之後見と喧嘩、大切可生涯^九云々、兒ハ逐電了、

(文明二年(1470)三月十五日、四卷396頁下2行)
兒が坊主の後見と喧嘩をした。捨ててはおけない(大切)ので生涯すべきということである。ここの「生涯」は寺からの「追放」か。殺すまでのことはないと思われる。

34 一京都西方以外迷惑云々、畠山右衛門佐可下向八幡之由支度、先以手者共下向了云々、爲在國歟、大略西方様不可有正鉢云々、京中并東山・西山堂塔佛各宮社以下無故焼失發向ハ、悉畠山右衛門佐并大内新佐之下知故也云々、代々御願寺共并顯蜜二宗之法文等滅亡了、此果且不可遁事也、不便々々、

近日可成生涯之由、右衛門佐之披官藤衛門相語云々、(後略) (文明二年〔470〕六月十三日、四卷441頁上13行)

「地位・所領・財産を失う」(没落)、又は「滅亡」。

35 一自筒井方申給山城宇治・水牧・山階等、悉以東方没落、十

六人、細川方披官十二人西方二降參了、今四人ハ木津・田ナヘ・井手別所・狛也、於此分者定可没落、然者山城事悉以可成西方、(中略)、東方様ハ只如籠中鳥也、

筒井箸尾・十市栖原等ハ一向同心、此面々ハ此間自東方勢等事雖被仰爲當國寺社致斟酌了、但如今者非可遁欺之間、無力彼面々ハ於自城可生涯云々、仍奈良中事雖有物忿、於筒井者不可及防禦云々、此等子細申入太閤畢、御迷惑云々、寺社可滅亡条被歎思召計也、

(文明二年〔470〕七月三日、四卷468頁上3行)

「生涯」は此の条における「没落」や「降参」とは違い、「滅亡」と近い。よつて、「滅亡」若しくは「命を失う」か。

36 一宝來^与高山・山陵間事、今日可及合戦之由處、仲人三人坂

上・越昇寺・秋篠色々計略之間、大綱可爲無爲云々、一向爲高山沙汰、引入武家可乱入之由支度、珍事々々、可蒙天討事也、肝要宝來方大勢也、筒井一門・栖原箸尾懸生涯致其沙汰之間、不取向于合戦而仲人罷出了、(後略)

(文明二年〔470〕七月二八日、四卷470頁上16行)

「失敗すれば地位や所領・財産を失う覚悟で」の意。

37 (前略) 然之間筒井手者城中乱入衆、不殘一人被打斃了、城

衆ハ杉十郎以下三十余被打、筒井方ハ數十人云々、手負不知其數云々、

松林院侍藤若丸・大安寺向兄弟・辰市堀父子・成身院之弥六兄弟・小南院之甲岡・^{十九歳云々}、栢木・元林院・白土中・窪田南父子等、一族若黨以下大略生涯了、

(文明四年〔472〕十月十六日、五卷306頁上1行)

「命を失う」「亡くなる」の意。

38 一古市披官^与蓬萊披官喧嘩事有之、古市披官蒙瘡畢、兩方引

分無爲、然而古市之中間共此子細ヲ聞付、彼蓬萊之披官之父入道六七十歳老者、於中市令斃害了、希有沙汰也、以外次第、就其彼老者之息男古市之披官人轉害郷住人召取之、於法花寺邊斃害了、是又不便之次第也、所詮彼入道と轉害住人とハ、一切不及覺悟生涯也、寂初之本人ハ無爲、如何なる因果哉、不便々々、(後略)

(文明四年〔472〕十二月十二日、五卷318頁上16行)

「命を失う」の意。

39 一昨日長谷川新於壺坂勸學寺邊被打死了、同道興田・安田

打死了、豊田相模・近江父子手物相具罷向沙汰了、天川下

向道云々、彼在所ハ越智領内也、及安内歟、新以下ハ爲長谷川黨雖十方申通、大略ハ十市相憑歟云々、

新与豊田確執之由來ハ、新披官内山法師ヲ、自新父方豊田二賣之處、自新方相支之、然而猶以自豊田方買取之了、新父子不和故歟、依此無念布留郷豊田之披官人召取之、三百余貫文責取了、彼者大略令逐電了、此事及兩三年事也、遠所之間不及寄、以目付一昨日致其沙汰了云々、但此事於于今者不可有落居期候、爲豊田父子并珍藏院、可爲生涯条勿論也、珍事く、新ハ本人也、興田・安田兩人ハ不運事也、

(文明五年〔1473〕八月十七日、五卷388頁下2行)

長谷川新を豊田相模(寛英)・近江(祐英)の父子が殺した。いろいろ過去からの経緯はあったが、殺した豊田父子と珍藏院(豊田慶英)をして、生涯を為すべき条は勿論である。豊田寛英、祐英父子や慶英はこの後も存命しているし、文明七年(1475)七月廿四日の条に「一豊田息近江公昨日祝著子細有之云々、平群嶋息女可成福智堂之縁之由兼約之處、近年没洛間異變云々」とある。とすれば、「爲生涯」の「生涯」の意味は「地位や所領・財産を失う」(没落)の意味であろう。

40 一井殿庄与池田庄溝相論事、巨細令記去月分帖者也、今日簡井律師并堯善遣十市方了、無爲計略可致其沙汰之由仰付之、池田庄者一乘院御家領、下司ハ池田之北、當時之給主ハ今市新也、井殿庄ハ三个所共二、當門跡領也、下司・給主相

共二十市也、仍兩庄相論事ハ、池田之北与十市懸生涯致其沙汰者也、(後略)

(文明六年〔1474〕七月一日、六卷3頁上13行)
「失敗すれば地位や所領・財産を失う覚悟で」の意味である。

41 一興弘得業方より申給、昨日神水、學侶・六方無異儀云々、來廿五日十市父子名字可籠五社・七堂、并南円堂大般若可有之、五壇法可始行之、過条ハ東金堂領事、新木庄事、中山寺事、大綱三个条也、珍事不可過之、新木庄事ハ恵心坊領也、故榮快律師之手より檜皮屋二買取之、當庄十市郷二在之、違乱子細有之故云々、中山寺事ハ供目代所行二加之歟、所詮豊田与十市不和之間、珍藏院任供目代之間、得時節十市生涯ヲ取立者也、(後略)

(文明六年〔1474〕十一月廿二日、六卷54頁上13行)
「地位や所領・財産を失わせる」(追放)の意。

42 一今日万歳之城二押寄、自城打出致合戰、寄手不知其數打死云々、筒井舜覺房被追越于河内國、以外次第散々事云々、自身及生涯歟之由雜記在之、所詮一族分物共大略被打敏云々、(後略)

(文明七年〔1475〕六月八日、六卷114頁上9行)
「命を失う」の意味。

43 一予鷹司殿ニ參申、瓶子等持參之了、一乘院殿入見參了、今度佐田名事巨細尋申之、當所名廿五名也、此内廿一名ハ御後見方二条知行之、二条知行分名共ニ奉行得分在之、其ヲ十方ニ借下方ニ足向入置之云々、公役ニライテハ一切不及違乱者也、然而質物ニ七名余訓英取之、号取流テ七名之内一二名ノ百姓以下自專シテ改之テ、一向成私領了、此七名人夫以下名役悉以斷絶了、奉行得分事ハ、二条奉行之間ハ、何方ニ借下足向ニ可沙汰トモ不知之、名田公役ハ朝夕方役之間、不可違乱事也、然而如此致其沙汰者、自余借下輩も名々ヲ上下悉以可自專之由申之、訓英之進退ヲ可見云々、高矢辻子以下申之云々、一庄顛倒門跡生涯不可廻踵者也、(後略)、(文明七年〔475〕八月十一日、六卷149頁下13行)

「一庄顛倒門跡生涯」とある所から、「一庄の正当な所有權が奪い去られる事になり、門跡は所領を失い、窮乏する」事になる。「生涯」は「所領を失い、窮乏する」の意であらう。

44 一宇治藤次郎大夫來、大内披官人悉皆三百人計有之、山城邊七十余人候、近日六七人在之、惣而合戰事自他不可有、可及生涯事無益之由各相存云々、

(文明八年〔476〕四月十三日、六卷237頁上16行)

(合戦で「生涯に及ぶ」というのは、「没落」とも、「滅亡」(命を失う)とも解釈できる。

以上、例11～44を再度簡略化して表二に示す。

表二

番号	年代	語句	「生涯」の意味
11	1685	爲座衆生涯者也	地位(売買の權利)を剥奪する
12	1682	生涯ヲサセテ可進之由	地位を剥奪して罷免する
13	1682	平郡之切答父子及生涯云々	地位剥奪・追放か、命を失うか未詳
14	1683	甲斐・朝倉之可成生涯云々	地位剥奪(罷免)、没落、又は滅亡
15	1681	門主被意得生涯被落處	地位や財産を放棄する、没落
16	1681	生涯衆合十二人云々	命を失う
17	1681	雖及生涯不可出旨	地位の剥奪(罷免)
18	1685	伊勢守披官町人一向及生涯云々	家の破壊や資産を奪う、殺害も含むか
19	1685	可及生涯計也	地位や所領・財産を失う
20	1685	自他門相分及生涯計儀出來	地位や所領・財産を失う
21	1685	兩人共以失生涯了	地位や所領・財産を失う、自滅
22	1685	當國引汲衆可爲生涯者也	地位や所領・財産を失う、没落、場合によっては滅亡(命を失う)
23	1685	法海上人生涯モ此由來也	地位や所領・財産を失う
24	1681	公方ノ可及御生涯之間	地位や所領・財産を失う(没落)、又は滅亡
25	1681	小者松石丸同生涯了	命を失う
26	1681	火事出來有之者、可及御生涯	命を失う
27	1685	寺門國中沙汰御生涯	沙汰の權限を失う(未詳)

番号	年代	語句	「生涯」の意味
28	1469	南院衆ヲ追懸く及生涯歟	地位や所領・財産を失わせる (追い払う)
29	1469	爲筒井一向成生涯	地位や所領・財産を失わせる (没落)、又は滅亡させる
30	1469	新御所く御生涯之由	命を失う
31	1469	去月十七日御生涯之様	命を失う
32	1469	懸生涯致計略了	失敗すれば地位や所領・財産を失う覚悟で
33	1470	大可可生涯云々	追放
34	1470	近日可成生涯之由	地位や所領・財産を失う(没落)、又は滅亡
35	1470	彼面々ハ於自城可生涯云々	滅亡、若しくは、命を失うか
36	1470	懸生涯致其沙汰之間	失敗すれば地位や所領・財産を失う覚悟で
37	1472	一族若黨以下大略生涯了	命を失う(亡くなる)
38	1472	一切不及覺悟生涯也	命を失う
39	1473	可爲生涯条勿論也	地位や所領・財産を失う(没落)
40	1474	懸生涯致其沙汰者也	失敗すれば地位や所領・財産を失う覚悟で
41	1474	十市生涯ヲ取立者也	地位や所領・財産を失わせる (追放)
42	1475	自身及生涯歟	命を失う
43	1475	一庄顛倒門跡生涯	所領を失い、窮乏する
44	1476	可及生涯事無益之由	没落、又は滅亡(命を失う)

表二から「命を失う」の例が増加しているのが読み取れる。
先の例6、7も一緒に示すと次の表三のようになる。

表三 「生涯(命を失う)」の意味の例

6	長祿三年(1459)	清憲得業く及生涯
7	長祿三年(1459)	御今参局く被失生涯
16	寛正六年(1465)	生涯衆合十二人云々
25	應仁元年(1467)	小者松石丸同生涯了
26	應仁元年(1467)	可及御生涯云々
30	文明元年(1469)	新御所く御生涯之由
31	文明元年(1469)	去月十七日御生涯之様
37	文明四年(1472)	一族若黨以下大略生涯了
38	文明四年(1472)	一切不及覺悟生涯也
42	文明七年(1475)	自身及生涯歟

例6、7が文脈から「命を失う」と読み取れるのに対して、
例16「寛正六年(一四六五)」以降の例は、確実に「命を失う」
「亡くなる」の意味である。「生涯」の語に「命を失う」の意味
が認められるのは、『大乘院寺社雜事記』の場合、寛正六年(一
四六五)以降と考えられる。

また、表三の「命を失う」の意味になる例を眺めると、表四

のようになっていて、「生涯」単独の動詞述語が増えてきている。そして、「生涯」の熟語例では「及生涯」の例が増えてきているのが分かる。全体の傾向も「生涯」の動詞述語的な用法が増加し、熟語例の方では「及生涯」の例が増加する。構文的な展開と意味の展開の関係については次の課題としたい。

表四 「命を失う」の意味を持つ「生涯」の構文的分類

「生涯衆」――連体修飾――例16	「生涯」単独例
「生涯之様」――連体修飾――例31	
「生涯之由」――句中の述語――例30	
「生涯了」――例25、37	
「生涯也」――例38	「生涯」単独の動詞述語
「及生涯」――例6、26、42	
「失生涯」――例7	「生涯」単独の名詞述語
	「生涯」の熟語例

このほか、表二から「生涯」の意味が「地位や所領・財産を失う」から派生して多岐にわたっているのが読み取れよう。

意味の展開として

- (1) 地位剥奪、所領・財産の没収（罷免、追放）
- (2) 没落（①逃げ落ちる、②落ちぶれる）
- (3) 破滅・破産

(4) 滅亡・命を失う

という展開がありそうであるが、これも全体の用例を考察してから考えることにして、その詳細は別稿に俟つ。

終わりに

今回は、『大乘院寺社雑事記』の「生涯」について、「命を失う」の意味がどのあたりから出てくるのかを中心に述べた。

文脈からは長祿三年（四五九）あたりの二例が見えるが、文脈に頼らずに確実に「生涯」に「命を失う」の例が見えるのは、『大乘院寺社雑事記』では寛正六年（一四六五）の「生涯衆合十二人云々」からである。「生涯」の意味の変遷については、多くの課題を指摘したにとどまる。今後、別稿を期したい。

【注】

(1) 「生涯」の動詞の自他については今は区別しない。また、先の論考では「命をなくす」としていたが、「命を失う」で統一する。

(2) 『大乘院寺社雑事記』について、『日本歴史「古記録」総覧 上巻「古代・中世篇」』（新人物往来社、平成元年（一九八九）十一月刊）より摘記する。この項の記載者は林屋辰三郎・五島邦治氏である。

(3) 「生涯」の意味の考察には、『大乘院寺社雑事記』内部の調査の他、室町期の事件や人物関係をインターネットで調べた（平成二五年十月～十一月の間）。『福井県史』の閲覧もインターネット上である。

このほか『ウキペディアフリー百科事典』やwebサイトの『Go
ブログ』、『kotobank.jp』等を参照した。これらによる人物関係や歴史的
変遷等の知見は有益であった。なお、最終判断は私の責任である。

(4) 『史料纂集 経覺私要鈔 第四』(続群書類従完成会、昭和五二年)の
「長祿二年(1588)十一月十二日、99頁9～12行」参照。

(5) 注(3) 参照。

(6) 注(3) 参照。

(7) 『新訂増補国史大系55 公卿補任』第三編(吉川弘文館、平成十三年
二月、新装版)、227頁。

【参考文献・使用DB】

・史料研究の会編(代表林屋辰三郎)『大乘院寺社雑事記総索引』上巻(人
名篇)、下巻(地名・件名篇)(臨川書店、上巻は昭和六三年、下巻は平成
元年刊)

・国立歴史民俗博物館 記録類全文データベース『大乘院寺社雑事記』

【付記】本稿は、平成25年度科学研究費補助金(基盤研究(C)、課題番号
2520472)「室町中期の古記録・古文書に於ける記録語・記録語法の研究」
の成果の一部である。

(ほりはた まさおみ／

大学院文学研究科第八回修了／熊本大学教育学部)